困ったこと

丸山ふみ

「先生、読書会の時〝劇的な機会、瞬間に子どもは成長するということ。暖かく優しいまなざしを大切にしたい〟と帰ってまいり、頂戴したテキストをまた自分なりによみかえしておりましたの。ところが、この間のテレビ（注、ＮＨＫわれら七〇年代・幼児教育）をみていて、主人とも話したのですが、わからなくなりました。

山の中の子ども（注、岩手県北上川上流の少年）が、この世の中にいたことにも驚きましたし、おしまいの漢字や英語も、びっくりしました。

見ていて何だか心配にもなってまいりました。ちょうどお兄ちゃんの受験（注、長男中学生）のこともありますので。

教えてあんなに覚えるのなら、教えてやったほうが、Ｎ男のためになるのでしょうか。

以下略」

十一月下旬、連絡ノートに記された母親のことばです。

私の園は、三重県のまん中程にある人口十万余の松坂市の中心から少し離れた、まだ田んぼの残っているところにある、級数六、園児数一六五名（五歳児のみ収容）の市立幼稚園です。

急速な宅地造成で住宅団地もでき、今の日本の平均的な生活が営まれている地域です。共働きの父母をもつ幼児がふえつつありますので〝連絡ノート〟と名づけて、ひとりひとりの幼児のようすや成長を、父母と教師とで連絡しあったり記録として残しておくノートを使っております。このノートにしるされております読書会は、父母の間を回覧している〝子どものしあわせ〟（日本子どもを守る会発行・月刊誌）を、それぞれが読んでいるの

でなく、お互いの感想を交換したいという母親達の希望から生まれたものです。

ところが、十一月の上旬、本屋から届いた〝幼児の教育〟を読んでいた職員の中から、

「十一月の読書会に、これを使いたい。ぜひやらせて。そうすれば、先月の読書会の解答にもなる」

という提案が出され、職員間で検討した結果決定したのが、

〝幼児の教育〟十二月号、二ページ〜九ページ「現代の教育と子ども」という周郷博先生が附属幼稚園母の会で話された講演の記録でした。

早速、読書会係が、全文をガリに切り、洋半紙五枚のテキストが用意されました。

あいにく読書会の日は、肌寒い日でしたが、参加して下さった十数名の母親で輪読が始まり、はじめの頃は、話しかけられている口調に、なかなかなじめなかったのですが、「……よね」の〝ね〟をうまく読んで下さったお母さんが、いらっしゃって、

「なんだか周郷先生が私に話をして下さったようだわ」

とひとりの母親は喜び、また、

「教会の友達から借りた〝母と子の詩集〟の先生とおなじ方じゃないかしら？」

といった母親は、その詩集の中にある〝子どもはなんでも知っている〟という詩のことを話され、

「周郷先生っておいくつ位なの」

「ねえ、どんな方？」

と意外なところへ話題が広がってしまいました。

このようなふんい気から、活発な意見や感想が出てまいりました。

「ことばって本当に大切ね」

「いやな程、私の話し方やしぐさに似てるの。これは、子どもって小さい時から母親にべったりだからかしら？」

「そうよ。冷たいまなざしでみつめてると、子どもの心の中までさむざむとしていくのが手にとるように分かる時がある わ」

「でもさ、女って衝撃をうけないなんて嘘よね。私達って、いつでもビクビクしているのに。」

「そうね、子どもが小さいうちはのんびりできるけど、お姉ちゃんみたいに、テスト、テストってかわいそうよ」

「でも、それを乗りこえていくことも、今必要でしょ」

中学三年生の長女をもたれるM男のお母さんの言葉は、真剣です。

〝強制されたものは役に立たない〟には共感される方が多く、その内容として自分の学校生活の中での思い出話になり〝先生に

よってこうもちがうの〃の例には、同じ教職にいる者として返事に困る一時もあり、

「こういうことを、ずばり、お母さん達に話してくださる周郷先生って好きやナ」

といわれたある母親の言葉は、いまもなんだか残っています。

〃これからどうしていけばいいのか〃ということで、

「わたし、目つきに気をつけるワ」

「だめだめ、目ってね、じぶんの気持が出るのよ。口だけうまいことといっても、目はごまかせないわよ。だから、目つきにだけ気をつけていても、中味がかわらないと駄目ね」

「今までね、どんな絵本買ってあげたらいいかなんていっていたけど、それもあかんの」

「誰さんなの、万博へ何度もAちゃん連れていったのは？」

「あの時だって、やっぱり子どもにいろんなものを見せておかないと、これからの世の中についていけないと思っちゃったのね」

「なんだか今の私達の生活の中に足りないものがあるようね」

「子どもが幼い時に、何かにめぐりあう。めぐりあわせることは、親ではできないのね。めぐりあったことを気づくようなひとになってほしいなあ」

「先生、私もう家に帰りたくなった。私って、本当に今までそんなこと一度も考えずにあの子みていたようよ。」

はじめての女児を通園させていらっしゃる若い母親の言葉に笑い声が早くも消え、皆が真剣な表情になってしまいました。

そのようなことがあって数日経ってから、テレビをみた母親から、連絡ノートに感想がぽつぽつ寄せられました。

「英語はよいのですが、あんなに漢字を知っている子がいるのに、幼稚園からお借りしてくる絵本を、眠る時読んでやっておりましたけど、自分で読ませるほうがいいでしょうか」

と昼間勤めていらっしゃる母親の質問には

「Hちゃんは、自分でも読めるのですよ、〃白いうさぎと黒いうさぎ〃はHちゃんの大好きな絵本ですから。

でも昼間お母さんがいらっしゃらないのですから、Hちゃんは〃お母さんに読んでもらえるのが嬉しい〃のではないでしょうか。お忙しいでしょうけど、読んであげて下さいね」

と返事を書いたものの、字が読めるほうが読めないよりはいい、物語の内容を、知らないより知っているほうがいい、だから、じぶんで読めることはいい、じぶんで読みなさいという理屈はあるかもしれないが、幼稚園でHちゃんが絵本を読んでいる口調は、きっとお母さんの口調であるにちがいない。Hちゃんは、お母さんが好きなの、だから、お母さんに絵本を読んでもらうことはH

ちゃんにとって嬉しいことにちがいない。それなのに、じぶんで読めるようになってほしいということを連絡ノートへ書けないのである。

文字を読めること、書けること、数をとなえること、書けること、小学校入学をひかえて、父母達はそういった知的能力の伸びることを望んでおり、小学校の新学習指導要領の移行措置で、一年生の学習内容の増加を、噂話として知っている。

その中で、私達は幼稚園の生活をとおして何を考えればいいのか。あのテレビの具体的に示された幼児の姿について、多くの父母の間ではいろいろと話されたらしく、ある父親から、次のような感想をいただいた。

「先生、テレビをみた時、これは大変だナとおもいましたよ。たいしたもんだとおもったのですけどね。戦後の教育をうけてる人は、当用漢字しかしらんし、使う言葉も貧しいですね。私のように戦前の教育うけてる者は、カタカナも平仮名も漢字も、たくさん知っております。昔の武士の子は、漢字を小さい時から読まされましたし、英国の子は小さい時から英語知っているやないか、と家内にいってやりましたよ。

字を知っていても悪いことに使って人間として悪い生活している者が今多いですね。うちの坊主のように寒くても平気で外でころころ遊んでいるのが幼稚園や。いま、のびのび、十分遊ばしたろやないか。人間はからだをきたえておけば、自分の進む道を自分で歩けるようになるさ。といいましたけど、まちがっていませんね。

でもね先生、現実には、進学する時、あんたとこはこの学校受験できません、といわれると親は困りますわ。

日本の子どもやったら、そんなに地域に差つけやんと、子どもの教育やのに、実験みたいなことやめて、五歳の時やること、はっきりしてほしいですわ」と。

（松阪市立花岡幼稚園）